

## LINE のグループトークにおける頻度依存戦略の検討

○本田志穂<sup>1</sup>・井小宮あすか<sup>1</sup>・中西大輔<sup>2</sup>・小杉考司<sup>3</sup>( <sup>1</sup> 広島大学大学院総合科学研究科・<sup>2</sup> 広島修道大学健康科学部・<sup>3</sup> 山口大学教育学部)

## 目的

近年、ソーシャル・ネットワーク・サービス (SNS) の 1 つである LINE が多く利用されている。多くの SNS はインターネット上で見ず知らずの人と関係を築くことに重点を置く一方で、LINE は日常的に対面コミュニケーションを行う関係においてこそ用いられ、対人関係の維持や親密度を高めるために使用されているという特徴がある (黒川・吉田, 2016)。

本研究では、LINE のグループトークでの意思決定に着目する。グループトークでは、会話がチャット形式で行われ、読んだ会話には「既読」がつく機能から、誰が返信しているか (していないか) を把握しやすい。また対面でのコミュニケーションよりも意思決定に費やす時間を比較的自由に設定でき、自分が返信するまでの時間を任意で選択することが可能である。これらの特徴は、他のメンバーの対応をみて自分の行動を決める戦略 (頻度依存戦略) を可能とする状況であると考えられる。LINE の利用目的が日常生活における良好な対人関係の維持にあることを踏まえると、そのグループにおける規範を破らないことは最重要課題である。このため、規範を破らないように頻度依存的にふるまうこと (Deutsch & Gerard, 1955) は適応的な戦略と言えるかもしれない。

本研究の目的は、LINE のグループトークで頻度依存的な動機に基づく返信行動が見られるかどうかを検討することである。具体的には、頻度依存動機に基づく返信の先延ばし行動が実際のグループトークの利用場面でみられるかどうかを検討した。

## 方法

調査参加者 回答者は大学生 50 名だった。そのうちグループトークで意思決定を行ったことのある 35 名 (男性 8 名, 女性 27 名, 平均年齢 20.68 歳, SD=0.93) を分析対象とした。

手続き Web 上の質問票に回答を求めた。質問票では、まず①利用している LINE グループの詳細 (人数, 自分の役割など) について回答を求め、

②最も頻繁に集団意思決定を行っているグループで、メッセージに気づいてからどのような返信行動をとるか (0: すぐに返信する, 1: 時間をおいて返信する, 2: 返信しない) を尋ねた。また、③LINE での返信時に一般的にどのようなことを考えているか、同意できる程度を 5 件法で回答を求めた (返信の動機づけ, 12 項目)。

## 結果と考察

返信行動について、「すぐに返信する」と回答した者が 1 名、「時間をおいて返信する」が 17 名、「返信しない」が 15 名、その他 2 名であった。つまり、多くの人々が返信を先延ばしする行動をとると報告していた。

返信時の動機について探索的因子分析 (最尤法, プロマックス回転) を行った結果、「自己呈示動機」と「頻度依存動機」の 2 因子構造が見出された (Table 1)。

Table 1 返信時の動機の因子構造

項目	I	II	共通性
<b>自己呈示動機 (<math>\alpha = .88</math>)</b>			
返信する時間がないほど充実した生活を送っているとメンバーに思われたい	<b>0.90</b>	-0.07	0.76
そのグループに関係していないことで忙しいと思われたい	<b>0.89</b>	-0.08	0.74
暇な人だと思われたくない	<b>0.79</b>	0.02	0.63
リーダーになりたい	<b>0.71</b>	-0.06	0.47
グループトークの主導権を握りたい	<b>0.61</b>	0.21	0.51
<b>頻度依存動機 (<math>\alpha = .84</math>)</b>			
模範解答を知りたい	0.01	<b>0.82</b>	0.69
メンバーの意見を踏まえて自分の意見を決めたい	0.00	<b>0.79</b>	0.62
周りに合わせたい	-0.18	<b>0.68</b>	0.41
少数派になりたくない	0.04	<b>0.66</b>	0.46
一人だけメッセージを送って責任を負いたくない	0.17	<b>0.64</b>	0.52
因子負荷量二乗和	3.14	2.68	
因子間相関			
	I	1.00	0.37
	II	0.37	1.00

返信を先延ばしにする動機を明らかにするため、頻度依存動機、自己呈示動機を独立変数、返信行動を従属変数とする重回帰分析を行った。この結果、頻度依存動機は返信の先延ばしを有意に予測した ( $\beta=.437, p=.015$ ) が、自己呈示動機は有意に予測しなかった ( $\beta=-.274, p=.119$ )。

本研究は、LINE のグループトークにおいて頻度依存的な動機に基づく返信の先延ばし行動が見られることを明らかにした。今後、LINE のグループトークにおいて頻度依存的な行動が本当に適応的な戦略となるかどうかを検討する必要がある。